

「2024年度バルセロナ大学スプリングスクール派遣報告書」

京都大学工学部1年 鶴衛 一真

①学習成果

- ・自分の英語が相手にほとんど伝わらなかった→逆に、相手の英語もスペイン訛りであまりわからなかった。英語はネイティブスピーカーとの会話が重要だと知った。
- ・スペイン人はパエリアを毎日食べると思っていたが、実際は減多に食べないことを知った。→日本における寿司と同じ感覚であるようだ。
- ・スペインでもドラえもんやクレヨンしんちゃんなどの日本のアニメが人気→登場人物は皆スペイン語で喋るので、これでスペイン語を覚える人もいる。映像メディアは言語の習得に効果的であると思った。
- ・日本人はやはり勤勉だと思われていた。逆に、スペイン人はすべてカタルーニャ的な物(フラメンコや伝統料理)が好きなのではなく、そのようにみなされることを嫌っていた。→これはステレオタイプカルな見方にスペイン人は強く否定的な態度を取ることを示している。
- ・スペインではスペイン語とカタルーニャ語を両方学習するが、その両者において、話す能力が突出していた。→これは、教授に質問して分かったことだが、スペインでは話すことを重視した教育を行なっているようだ。単語が似ているとはいえ、極めて実用的なスピーキング能力が突出するような教育法は、日本人の英語教育に取り入れると有効なのではなかろうか。

②海外での経験

- ・サッカーを観戦しに行ったが、スペインではサッカーに熱狂的な人が多かった。身内でもない人の試合をみて、勝敗に一喜一憂し、挙げ句の果てには周囲の人が皆涙を流すという光景は、なかなか日本では見れないものであったので、サッカーをそれほどまでに重大な心の拠り所とできるのを羨ましく思った。
- ・バルセロナ大学に行くと、大抵の人が英語を流暢に話していた。ディスカッションでは全く詰まることなく難しい概念を語っていた。これは日本にはない語学力で、私の英語学習の大きな動機となった。
- ・casa batllo にて、ガウディはその外観を図面を描くことなしに、全て外から見て監督していたということを知り、「絵画のように建築する」という彼のスタンスが最も印象深く受け取れた。
- ・モンセラート修道院にて、黒いマリア像 (La Moreneta)を見たが、多くのキリスト教信者がその像に向かう階段で泣いているのを見た。無宗教の私ですら何らかのオーラを感じたが、宗教とはこれほどまでに人の心を驚掴みにするのかと驚いた。
- ・世界遺産の中にある小学校に訪れた。この事実だけでも驚きであったが、この校舎には本格的な劇場があり、音楽家を雇ってここでオーケストラを行うと聞かされた時は驚いた。芸術の才能を養うためにここまでできるのは、やはり伝統残る旧市街の建物であるからだろう。

③ プログラム内容

概ねスケジュール通りに進み、大学にてスペイン語、カタルーニャ語、スペインの歴史や政治経済を学び、現地の学生とディスカッションをして偏見などに関する意見を交換した。自由時間は観光に充てることができた。

④ 進路への影響

当初の目的としていたガウディの建築を直で見、その感触を生で味わうことができた。どこまでも体に馴染むデザインと、自然と調和した外観や内装というのは、言葉で飾られているようで実際に見てみなければその本質は掴めない。今回のプログラムで、ガウディは、もし仮に自分の中で言語化するとしたら、自然をデザインとして、芸術として受け取り、それを建築の中に再現しようとしたと言える。この自分で受け取った感触をもとに、将来自分が所属したい景観工学の分野に活用したい。